

或本の反歌に曰く

三八一三番

我が命は 惜しくもあらず さにつらふ 君によりてそ  
長く欲りせし

右、伝へて云はく、時に娘子あり、姓は車  
持氏なり。その夫久しく年序を経れども、  
往来をなさず。ここに娘子、係恋に心を傷  
ましめ、疾疢に沈み臥せり。瘦羸すること  
日に異にして、忽ちに泉路に臨む。ここに  
使ひを遣り、その夫君を喚び来す。すなは  
ち戯歎き涙を流し、この歌を口号び、登時  
逝没りぬ、といふ。

贈る歌一首

三八一四番

白玉は 緒絶えしにきと 聞きし故に その緒また貫き  
我が玉にせむ

答ふる歌一首

三八一五番

白玉の 緒絶えはまこと 然れども その緒また貫き 人  
持ち去にけり

右、伝へて云はく、時に娘子あり、夫君に  
棄てられて、他氏に改適す。ここに或る壯  
士あり、改適せることを知らずして、この  
歌を贈り遣はし、女の父母に請ひ逃ふ。こ  
こに父母の意に、壯士未だ委曲らかなる旨  
を聞かずとして、すなはちその歌を作り報  
へ送り、以て改適の縁を顕す、といふ。